菜菓播種抄　四之上

萬葉集巻第四

相聞

奉(タテマツル)上在(イマス)山跡(ヤマト)皇兄(スメラミコト)御歌一首

難波天皇妹

一日社 人母待告 長氣乎 如此所待者 有不得勝

ひとひこそ人もまちはしけなかきけを
かくまつるれはありえさへすも

岳本(ヲカモトノ)天皇御製一首并短歌

今案有高市岳本(タケチヲカモト)宮後岳本宮二代今所指未審何帝

神代従 生継来者 人多

かみよゝりあれつきくれは人さはに

國介波 滿而 味村乃 去來(ガヨヒ)者

くにはみちてあぢむらのさわきは

行跡 吾戀流 君介之不有者 晝

ゆけとわかこふるきみにしあらねはひる

波 日乃久流留麻弖 夜者 夜之明流

は日のくるゝまてよるはよのあくる

寸食 念作 寐宿難介登

きはみおもひつゝいもねかてにと

阿可思通良久茂 長此夜乎

あかしつらくもなかきこの夜を

相聞(アヒキカスル) 徂日こひのうた乃事也 既目於前ゟ注

皇兄 仁徳天皇をと申す

なりや

難波天皇妹 仁徳乃御妹

妹ハいかなる人ぞ誰に

おはしましや

いとひこそ人をも待つけ

ながきけハ氣なく

なとゆふこと同嘆息す

るのミとこえさすとハ

堪かたきこと一日

斗なとハ人も待れ

ちきみをも待けがく

久しく待れるハ難

堪がたし兄君を戀慕(レンボ)

すハあれとも心たの

さるれハ胸中に入れ

かみよゝりあれつきてハ

生継来 神代よりこの

くに人生れ継生れ継

て此土にみちて繁く

さかえし伊弉冊(イザナミ)尊万民

を日ゝに千頭(チカウベ)ころさ

むとのたまへハ伊弉諾(イザナギ)尊我ハ日ゝに千五百頭(チイホカウベ)うまんとのたまふ日本紀にあり

あちむらのさわきハ 定家ハあちさハといへハ仙曰味村ハ鳧也いさといへハ鳥

ハ鳥の羽音さわしきこゆれハ云又村鳥の一つをも立翔れハ皆

ともにたちさハくによそへよめる也 去来味村のとハさかまきにゆけ

そてりん枕詞也 人かくかふそくさにゆけを我かふかきねハ路日

隨夜いつしかつゝくことハ 云ふ如くさハかぬハねと

寐向するとハ明るまてハ明るを待也 岳本天皇ハ

486

舒明天皇の御子は岳本の草壁
皇子の追号也いつれふり
やまのをのへにあぢむらこまハ
古本風俳やに祇本亦同
祇曰あぢむらこまとハ白鴎
駒影まといひて候
ゆく路ちるのごとく山の
端に日乱の去る空をいひ
いつくあぢむらさわき

反歌

山羽 味村 驂 去奈礼騰
やまのはにあぢむらさわきゆくなれど
袖中抄 あぢむらさわぎゆくなれど

吾者 左夫思恵 君二四 不在者
われはさびしゑきみにしあらねば

487

淡海路乃 鳥籠之山有 不知哉川
あふみぢのとこのやまなるいさやがは

氣乃己呂其侶波 戀乍 裳将有
けのころごろはこひつつもあらん
家本万時 ゆふころごろハ 類聚同

ゆけるも我ハさびしきもなし
なほあぢむらさわきとは
ゆけるも我ハさびしきもよめるも同
袖中抄ハあぢ村さわきとてと仙覚
抄に同ちむらさわきとよめるもさ
仙覚 類聚万葉并定家卿の
とこの山いさや川淡海の名也以下向氣乃己呂其
ゆふみちのとこの山なる
ころハ立ても何んと和せり さうひけのころく
とよむへしけるやけのハ今の中略の詞ころハのころとみ
音通ふ以上句何みハ急と詞とこれ山ハ床にたへいさや川ハいさやといふ詞に
よせたる名木を上句によみて急といひ床ちといへるもいさやあえてとて

488

近江天皇を思ひて額
田王ハ天智の寵女也
きみまつとわかこひ
をれハ我宿のすたれうごかし
秋の風吹

その心をいふなるへしよみいハかくてけふ待ける心をなさとされば
いつせんとかくめさるし上句ハ吹くる風の簾を動かして人の来るかと
思はせたるに心をいふなるへし

思近江天皇作歌一首

額田王

君待登 吾戀居者 我屋戸之 簾動之 秋風吹
きみまつとわかこひをれハわかやとのすだれうごかしあきのかぜふく
風秋の吹く

489

鏡王女 作歌一首

風乎太尓 戀流波之 風小谷 将來登時待者 何香将嘆
かぜをだにこふるハともしかぜをだにこんとしまたバなにかなげかん

かせをたにこふるハとも
炎天なとに風を恋れ
ハいかにかくのそら
きさこされハ風をたに
恋まんとなるハ何くさ
きてハいつ吹人にも君
待侘きこといやれとし

490

吹黄刀自
真野之浦乃 與騰乃継橋 情由毛
まののうらのよどのつぎはしこころゆも

まのゝうらよとの
心ゆもしハ心より也由を
ゆハ従の字とおなしとも
よみてもおもふへく
よめるものは心に乃二め

思哉 妹之 伊目 尓之所見
おもへやいもかいめにし見ゆる

河上乃 伊都藻之花乃 何時 何時
かはかみのいつものはなのいつもいつも
来益 我背子 時自異目八方
きませわかせこときしけめやも

ていへるは五素おもひはなさるゝし八雲抄に橋渡に伊目ハ見安に夢を云と
夢ハ二つねありともいつよみし橋にかくハ谷川なとに渡して有りも
ゆくりこもしされハ源氏物語に夢浮橋とも云夢ありて見ゆると
いへんとくかはかみのいつものつき橋とよめるにやあらんやハさふりし
かはかみのいつもの花のいつもいつもとさゝれるましいへん
こと才一の句才二の句ハいつもいつもと云ハん為也仙臣物をかねたる
いハゝいつもいつのほとりたる多くハ花も藻の花をかねたる語也
日本紀第三ニ名所置厳瓮為厳瓮又火名為厳香来雷水名為厳
罔象女粮名為厳稲魂女薪名為厳山雷草名為厳野椎といへ
るも道臣命ニ事よむすひの事をゆるし給いつのめのましニ見安ニハ藻の
花ハあたり出る故にいつ藻と云二仙説時自異目いときしけめと和

すけせんやと云に同
ころもてにとりとゞく
就を云ひて袖に云
付くまとはる子にも
まさりて云ふ我を置
ていかに別れなんと
也まていかに妹立へん
妹を置て別ゆかん
りしきたへを独ね
て我を恋んと也
舎人吉年ハ女にや
わきもこをあひしらせ
しめさるゝおハ見して
もいはれハうらめしき
せ人を恨めとなり
としわりあさきなりや

田部忌寸櫟子任太宰時歌四首

舎人吉年

衣手 取 等騰己保里 哭児尓毛
ころもてにとりとゝこほりなくこにも
益有 吾乎 置而如何将為
まされるあれをおきていかにせん

田部忌寸櫟子

置而 行者 妹将恋可聞 敷細乃
おきていかはいもこひんかもしきたへの
黒髪 布而 長此夜乎
くろかみしきてなかきこのよを

吾妹児乎 相令知 人乎許曽
わきもこをあひしらせしひとをこそ
恋之益者 恨三念
こひのまされハうらめしとおもへ

朝日影 尓保敞流山尓 照月乃
あさ日かけにほへる山にてる月の

不厭仙あかずや 君童手 山越介 置きて手
あかざる きみを山こしにおきてく

柿本朝臣人麻呂 四首

三熊野之浦乃濱木綿百重成[イ有]
みくまののうらのはまゆふもゝへなる
心者雖念直不相鴨
こゝろはおもへとたゞにあはぬかも

あさ日かげにほへる山
類聚万葉 或注本作てらさ
る君を 童蒙抄作てらす
おもひを和と同抄云こ
ま八朝日の照るまでてる
明の月此山の端にかゝ
りてあかぬ君をとくに
うちあかず立の心をよせたる也かゝてるとハあさ日の影に映じあかざる
とハ古し或曰あの山のし近きる明の月ハあかりてしあかす夜の明るま
ちてらう明月出んとするようにかゝりてあかねばあかずよめり山
こしにへたつる也但或本三八山こしに(?)すとぞ仙覚ハあかずや君をといふ
みくまのゝうらハ紀伊の国也 綺語抄云濱ゆふハ芭蕉葉に似たる草也濱より
生る也葉のかさなりたる也三熊野ハ紀伊の国熊野浦をいふ八雲抄同
但童蒙抄云此うたハ伊勢の大饗の時ハ多く是を包む料に伊勢より三熊
野のうらへ都にたてまつると仙覚も此説に非ずといへり伊勢とハ伊勢の紙
貝いせのうらに多の八百重にあへりはあまにとなげくゆへ集をもて過ぎ

人乃名をも多く稀かもしるすことてしるしけハ多なしかんにへとゆるされん
定家卿の説のまゝよりて此うたの意をいふやなげきてあるにしとあり伊
勢もし濱ゆふをよみり

古爾有兼人毛如吾歟
いにしへにありけん人もわがごとか
妹爾戀乍宿不勝家牟
いもにこひつゝいねかてにけん

いにしへのうた人
いねかてにけん只いね
られんとなる
こゝハ我ことゝ也

今耳之行事庭不有古
いまのみのわざにはあらずいにしへの
人曽益而哭左倍鳴四
ひとぞまさりてねにさへなきし

今のみのまさりハ
立ハむかしよりありか
きたるといふ事也

百重二物来及毛等念鴨
もゝへにもきしかぬかもとおもへかも
公之使乃雖見不飽有哉
きみがつかひの見れどあかさらん

もゝへにも来及ぬかもと
いはくまて百度にも
及ぶりしとおもふのきみが使
の度かさなるとみれと
あかさらんとそ

秦檀越往伊勢國時留妻作歌一首

碁檀越 男乃名也
姓名未詳

神風之伊勢乃濱荻折伏
かみかぜやいせの濱おぎをりふせて

客宿也將為 荒濱邊尓
たびねやすらんあらきはまへに

かみかせやいせの濱荻
神風之誤字ともいふへき
を童蒙綺語奥儀抄
に引古今にも神風
やと和して可なる故也
童蒙抄云濱荻とは
伊勢には芦を云
八雲御抄曰男花茎下
るを云ふてよめるし
をとめらか袖ふる山乃
拾遺集にはしめことを
久しき世より思ひそめてき
ここに童蒙抄にも拾遺二
をとめらかとは袖振といはん枕詞 袖振山は八雲抄に大和吉野にまた童蒙抄
云人丸は天平の時代人也 崇神天皇三年秋九月に都を磯城
さしわかのみやを瑞籬宮と云と日本紀にあるよりされは

三首　　柿本朝臣人麻呂

未通女等之 袖振 山乃 水垣之
をとめらかそてふる山のみつかきの
久時従 憶寸 吾者
ひさしきときゆおもひきわれは

夏野去 小牡鹿之 角乃 束間毛
なつ野ゆくをしかのつのゝつかのまも
妹之 心乎 忘而 念哉
いもかこゝろをわすれておもへや

珠衣乃 狭藍左謂 沈家 妹尓
しまきぬのさゐさゐしつみ家の妹よ
物不語 来而 思金津 裳
ものいはすきておもひかねつも

乃かこりかの時也久しきよりといふ是ハ拾遺にかはりていふ也としみ垣の
かよめるにこと或説袖ふる山ハ只布留山也神かきハ瑞垣也こゝにいふ
夏野ゆく小牡鹿乃角の　仲夏五月乃夏至日鹿角解とあるをいへり
礼記にえてより抑ちかきよの角かちかく今出る角ハきはめて短き
ぬるには也くはつかのまもこといはんとつかの也　祇日云の鹿ハ角生初く短かくて
一束斗あるを云　玉衣妹を云ふ何れにせよ時の事はかりにこれにも我と云るし
しまきぬ乃さゐさゐしつむ　袖中抄云玉きぬハさぬくハいねをやと
円あやきぬ乃彩きぬいハさやしとあるくさつむハ居所
といふん玉衣玉きぬ乃何さやかなるきぬの事をひさやくとして
さつみわりなり　妹に物もいはすきて　云信之或説狭藍澤とも云非也
きみかいへに我住坂の
巳安云住坂名所也
君か家に我住坂と
よりて夫の家にも女かゆき
住みとてよひて我命の
限は君か家をわすれし

一首　　柿本朝臣人麻呂妻

君家尓 吾住坂乃 家道乎毛
きみかいへにわかすみ坂乃いへちをも
吾者 不忘 命 不死者
わはわすれしいのちしなすは

二首　　安倍女郎

こよめり
いまさらに何をかおもはん
既に心ハ君ニよりにき
てよる心のほかに更に何を
をおもハんといへり従う
ちちなきハ一向と同
わかせこハ物なおもひそ
何事にありともよくと
なりとも我ハ成て失
へき我なくもあらし
我せこハ物なおもひそ
よめる也
まくらゆくの枕をくる
浮ねとハ水鳥船中ホ
る上に寝るをいふ也
乃間の浮寝をと云し

505 今更 何平可將念 打靡 情者君尒 縁尒之物乎
いまさらになにをかおもはんうちなびきこゝろはきみによりにしものを

506 吾背子波 物莫念 事之有者 火尒毛水尒毛 吾莫七國
わかせこはものなおもひそことしあらばひにもみつにもわれなけなくに

駿河釆女歌一首

507 敷細乃 枕従 久久流 涙二曽 浮宿乎思家類 戀乃繁尒
しきたへのまくらゆくゝるなみたにそうきねをしけるこひのしけきに

三方沙弥歌一首

508 衣手乃 別今夜従 妹毛吾毛 甚戀名 相因乎奈美
ころもてのわかるこよひゆいももわれもいたくこひんなあふよしをなみ

ころもてのわかるこよひ
妹もわれも衣を別く
るハ袖と袖とわかるを衣
手代ると云なり別
るゝ夜より又逢由なる
くいたく恋んと也
をとめ 見安云臣女
訓は佳る女也 玉篇読
たをやめとハ見の字
さにつらふ 紐をほどき通
なくたつの ねのみ鳴
いへのあたり 吾立見
家のあたり
やまハ葛木山の雲ま
隠れてとしすなの也

下筑紫國時作歌一首 丹比真人笠麻呂

509 臣女乃 匣尒乗有 鏡成 見津乃濱邊尒 狹丹頰相 紐解不離 吾妹兒尒 戀乍居者 明晩乃 旦霧隠 鳴多頭乃 哭耳之所哭 吾戀流 千重乃一隅母 名草漏 情毛有哉跡 家當 吾立見者 青旗乃 葛木山尒 多奈引流 白雲隠 天佐我留 夷
たをやめのくしけにのれるかゝみなすみつのはまへにさにつらふひもときさけすわきもこにこひつゝをれはあけくれのあさきりこもりなくたつのねのみしなかゆわかこふるちへのひとへもなくさもるこゝろもありやといへのあたりわかたちみれはあをはたのかつらきやまにたなひけるしらくもかくれあまさかるひな

あをはたのかつらき山
又按云旗よりかつらきへ
いまのはる旗ならんの
かつらきとつゝくるも
仙覚本には色かへて
乃ちくなきは雲旗り
然れはまたもの葛木
とつゝくる也　玉葉　旨従るや
よむにあらさるを
三津の濱　ミツ　つゝくに
いはには淡路直に向ふ也
粟嶋を　いへる粟嶋の來
行渡と渡の字を
何岐をおいすといふ
あるなし　後撰の哉
むこの浦なり　舟子これをよふ也　舟子をかこといふは八道神乃御字に月向諸縣君（ノモロアカタノキミ）

乃國邊尓直向淡路乎過粟
のくにへにたゝむかふあはちをすきてあは
嶋乎背尓見管朝名寸二水手之
しまをそかひにみつゝあさなきにかこの
音喚暮名寸二梶之聲為作
こゑよひゆふなきにかちのおとしつゝ
浪上乎五十行左具久美磐間乎
なみのうへをいゆきさくゝみいはのまを
射徃廻稲日都麻浦箕乎
いゆきもとほりいなみつまうらみを
過而鳥自物魚津左比去者
すきてとりしものなつさひゆけは
家乃嶋荒礒之宇倍尓打靡
いへのしまありそのうへにうちなひき
四時二生有莫告我奈騰可聞
しゝにおひたるなのりそかなとかも
妹尓不告來二計謀
いもにのらてきにけむ

牛といふ物鹿に乗て海を渡りきて帝乃御船に従ひたてまつりし鹿子（カコ）
乃水門（ミナト）と云播磨風土記也　凡水手曰鹿子（カコ）蓋始起于是時也　日本紀第十にみえたり
さて又　仙覚は舟子を舟乃上をゆくは浪をこくやうに見ゆれはし
こきてをいふなりとあり　仙覚のみるをしるへと云字により梶を
いはまとりてかきのせたりといへり　いまの書　仙覚播磨也
又按云書乃いはまといふ　玉葉いふとは書をうたかひぬへし
いそをいふ　仙覚は手をいふ　是を　玉葉皆非也　曰訣
いはし物　艪は人の手なれはさるかとそいへる　權也　艪は
縁をとりて磯をさしてゆくをいふなり　ゆへにさなりぬ
いへの嶋　八雲御抄に播磨といふ　家嶋とは國名とし
きて今はいつる　又按云詩にかなへり　おもひやるさ　玉葉　神馬藻のなのり
藻と菜なるといふ　渾の莫告と出たり　允恭天皇乃衣通姫乃
哥に海乃濱藻のよるかへると是歌（ヨミウタ）不可聆他人（スベカラクキカスヘカラスヒトニ）と勅ありけれは
濱藻をなのりそといふなり　日本紀十三にあり　此故に莫告と書
など乃事なり　是は勅なれは我君にゆくときは　ちゝ母に莫告と
よく誤たり　またつかはしなくてとはいはれるをなけきてよめるなり

しろたへの袖ときかへてかへりく
又安云たゝりけん袖を解
かへて切にちきりし日は
生そんをもとめてゆくは妹
かつ思てあらんおもひち
まつ人おもふ故まうしに
おこりは妹子若しくまに
たんとみる心をえたる之
幸伊勢　聖武行幸の時
わかせこはいつちゆくらん
奥津藻は深に隠れて
あまれは隠の山の枕詞
かくし隠の山八宅
流れに伊勢也とこ
いまた田此わけの
又安りしわかしら六

又歌

白妙乃袖解更而還来武
月日乎数而往而来猿尾

しろたへの袖ときかへてかへりこん
つきひをかぞへてゆきてこましを

幸伊勢國時作歌一首　當麻麻呂大夫妻

吾背子者何處将行巳津物
隠之山乎今日歟越良武

わかせこはいづちゆくらんおきつもの
かくれの山をけふかこゆらん

一首　草孃

秋田之穂田乃刈婆加香縁相者
彼所毛加人之吾乎事将成

あきの田のほたのかりばかかよりあはば
そこもか人のわをことなさん

田をかりとるとゆく也　仙田乃かきそと云又しかはかおりてうこかの
人乃云ふ田をこわれはかり刈ゆくをにおりて人にかゝりにはれは云
かりまちつるやを遂に比喩云し
大原の此市柴　序詞也
成る大きなる原のいつく
きたと又と恨し霧塞
右浅は此市柴を初めて
愛おもう妹にすく大原の里人
信実坂市柴の花と読り
わかせこかきせる衣の
きせる衣は着せる
衣とふし針目おちすは
針目無く丈の衣の
汁めて下心をへく
縫ひとつゆく深切
とあはせる衣也

志貴皇子御歌一首

大原之此市柴乃何時鹿跡
吾念妹尓今夜相有香裳

おほはらのこのいちしばのいつしかと
わかおもふいもにこよひあへるかも

阿倍女郎歌一首

吾背子之蓋世流衣之針目不落
入尓家良之我情副

わかせこかけせるころものはりめおちず
いりにけらしなわかこゝろさへ

中臣朝臣東人贈阿倍女郎歌一首

獨宿而絶西紐緒忌見跡

ひとりねてたえにしひもをゆゝしみと

516

ひとりねて絶にし
ゆゝしみとハ忌きらふ
ともね独宿に紐の切れ
たるハ中絶るゝものなれハ
それハ忌ゝしきとて
せんすへしらにハせんかた
なさにとの事

世武為便　不知　哭耳　之曽　泣

せんすへしらにねのみしそなく

答歌一首　阿倍女郎

吾以在　三相二搓　流縁用而　附手益物　今曽悔寸

わかもてるみつあひによれるいともちて
つけてましものいまそくやしき

わかもてる三つあひ　三筋合せしより糸也　三相ミツアヒ　江本の点の如し
仙覚ハ東人か紐の絶るを忌てく　紐けハ我かよりたる
し糸を持るまゝに糸をもて紐を付てましを　といふ事也
ましものを悔きとし　仙覚略注

517

一首　大納言兼大将軍大伴卿

神樹尓毛　手者觸云乎　打細丹　人妻跡云者　不觸物可聞

さかきにもてハふるといふをうつたへに
人妻といへハふれぬものかも

さか木ハもとより
榊ハ神木なれハ
かるもみ人妻ニふれ
ぬことよといふ八
雲かうちとふて備ニ

518

一首　石川郎女

春日野之　山邊道乎　與曽理無　通之君我　不所見許呂香裳

かすかのゝやまへのみちをよそりなく
かよひしきみかみえぬころかも

ことハ心也　吾妹我より
つけと云心と同しく
ひかよひけるかみのころ
かすかの山への道を
仙曰よそりなくハよう
へよるよしもなくかよ
ひしとよめると　五索
いかにとハ滞る

519

一首　大伴女郎

雨障　常為公者　久堅乃　昨夜雨尓　將懲鴨

あまさはりつねするきみハひさかたの
よへのあめにこりにけんかも

何か常すると常する
あまさはりつねするきみハ
あめふるをりもやまのちハ
あめもさハりとなるへき
にぬれてとハ
といへるそれを
あまとも
もとと真儀かり
但上古にハ

後人追和 大伴郎女が歌を後人の和する也
久かたの雨もふらぬか
ふらぬかはふれかしに あまつゝみと
いふは雨隠れして雨をつゝしむ也
又いふ雨衣を被て君にそひ
居らくは君とともに雨
つゝするをのひくらさん
と雨隠れによそへて
ひとひ月と言ふくさは
あまもふらぬかと大伴
女郎よみける心をしのびや
遷任 受領の四ヶ年の
任はてゝ国かへるたれ
庭にたつおさて
いふまでとよみて

後人追和歌一首 作者未詳

520
久堅乃 雨毛落粳 雨作見 於君副而 此日令晩
ひさかたの あめもふらぬか あまつゝみ きみにたぐひて このひくらさん

藤原宇合大夫遷任上京時贈歌一首 常陸娘子

521
庭立 麻手苅干 布暴 東女乎 忘賜名
にはにたつ あさてかりほし ぬのさらす あづまをみなを わすれたまふな

宇合は式部卿 養老三年七月任常陸守 … 東女 八雲抄あづまをとめと云 仙覚抄 古来風躰奥儀抄云 奥義云 … 古本奥儀 … 麻のことを … 庭立の …

云こ童蒙抄にも此歌あり …
まことに安芸庭たつ麻手(アサテ)は麻をかりて布にさらす也 麻は
とよむは東女我をもわすれ給ふなと上京の別を惜みてよめる也
京職大夫 左京右京ある
とある大夫なるへし
藤原大夫 或本云京職
大夫藤原麻呂大夫云々
をとめらか玉くしけ
童蒙抄云玉櫛とぞ
よまれたると云り童蒙抄
有上古ハ廣く云けり
ハ櫛の縁にかみといひ
といひかけたる也
助字也 何ぞ
妹にあはて逢ぬと
よくわたる人は年にも

贈大伴郎女歌三首 京職藤原大夫

522
嬬等之 珠篋 有玉櫛乃 神家武毛 妹尓阿波受有者
をとめらか たまくしけなる 玉くしの かみさひけんも いもにあはすあれは

523
好渡 人者年母 有云乎 何時間曽毛 吾戀尓來
よくわたる 人は年にも ありといふを いつのまにそも わかこひにける

524
蒸被 奈胡也我下丹 雖臥 與妹不宿者 肌之寒霜
むしふすま なこやかしたに ふせれとも いもとしねゝは はたしさむしも

乙安云よくわする人ハまみもとハ七夕のうく 玉案 七夕ハ年の渡りとをしゆ
かへしわ待りまて心よくことと云を我ハさやうの物思もなくて見ましし
いつのまにかとやかてこひわたりけれハぬ物思ひをまさる意をせめてし
何にかもあるこやらん下 乙安云よふ此蒲団をこやとせと云之 例の所のあつくお
くまれハ辛苦するも何をそしくやゝきしるる下小出れとも思とわくハ宿を
しとよめる趣をこやとよへるやの字ハ助乃語也 玉案 柔(ナゴヤ)和(カ)乃字とし和(ナ)ご(ヒ)也
佐保大納言 長屋より
無禱 ならりあし事疑
さほ川乃河ほとりに
せ家ハ彼よく渡る人
家もなり玉ふと讀
み和なる九こまれく
る夜とハ麻呂大史の駒
みくくるすハ是れなと
まハ為れ渡りなむと
らぬ八七夕の如くう

和歌四首

大伴(トモノ)郎女(イラツメ)

郎女者佐保大納言卿之女也 初嫁一品穗積皇子 被寵無禱 而皇子薨之後 藤原麻呂大夫娉之郎女 家於坂上里 仍号坂上郎女

狭穗河乃小石踐渡 夜干玉之 黒馬之來夜者 年尓母有糠(イあるゝ)

さほ川乃こいしふミわたりぬはたまの
こまのくる夜ハとしにもあらぬか

千鳥鳴 佐保乃河瀬之 小浪(イさゞら浪) 止時毛無(イ無時毛) 吾戀者

ちどりなくさほのかはせのさゞれなみ
やむときもなしわがこふらくハ

將來言毛 不來時有乎 不來云乎 將來常者不待 不來云物乎(イ不來云物を)

こんといふもこぬ時あるをこじといふを
こんとハまたじこじといふものを

千鳥鳴 佐保乃河門乃 瀬乎廣弥 打橋渡須 奈我來跡念者

ちどりなくさほのかはとのせをひろみ
うちはしわたすながくとおもへば

大伴坂上郎女
一首

佐保河乃 涯之官能 小歴木莫刈(イ莫刈) 在作毛 張之來者 立隱金

さほがはのきしのつかさのしばなかりそね
ありつゝもはるしきたらばたちかくるかね

賜(タマフ)海上女王(ウナカミノオホキミニ)御歌一首 案此謌擬古之作也 但以時當便賜

と之類聚万葉ニハ何る
りと和ス何やたゝ心詞
ちどりなくさほの
序歌之波の止時なき
ことく恋る心やまさとし
こんといふもこぬ時ある
四明かなし
ちどりなくさほの
乙安云河門ハ河のつよふ
渡ある所之 玉案 打橋ハ
板を打渡しての橋之なり
くハ渉り来るそ
さほ川のきしのつかさ
一条殿哥林良材ニハ小歴木
をわかくぬきとよみく
何かさハきそやとある

玉乗ぱわりくぬぎこへとか
らしきうつもまら乗
こゝハ枝紫葉凡作な
隠んと之但仙覚ハ小壁木
とよむことよむなのつ
ふさハ茎のつきさくと
小壁木よてとよむ由
諸本ハ一首れ
かうこゑれこゆる寸き
又安云一るとりハるを二あ
きくありし玉乗柵ハ和名云さくとよむ乎経でし物也よ寿ハ志めゆいしと云
そん序りオ一オ二句ハよまセかりてるをかりなこめてるやうかド作しる
妹か心ハ駈にりしとく　イまがきに玉篇ニ柵編竪木也ニカキ又ニ是もよ結との序
あつさら爪引まひく夜音と。高乗の隠オ此経打の心し夜の経寿ハ妾くゆるそ
おもれハとそれきも　きこしといふんとく乃序あしそうを待るる故り
今乗此ゆを多くゆうし娘と之類聚万葉等乃古点きくらうゆきさ

530
斯歌ヶ歟　天皇

赤駒之越馬柵乃緘結師
妹情者疑毛奈思

あかこまのこゆるうませのしめゆひし
いもかこゝろはうたかひもなし

531
奉和歌一首　海上女王

梓弓爪引夜音之遠音尓毛
君之御幸乎聞之好毛

あつさゆみつまひくよおとのとほとにも
きみのみゆきをきくしうれしも

億きくハしけんを
うちひさすみやにゆくこ
内日指又おほみや仕人を
帰りて別を惜むあ
あらくしまを只惜き
也なにはかたあを
と思ふやまも
すべて此
あふに切
名ハ隠
かく序あ之
人ハ女我
ハ柿ニ
とほ
遠
たりよう題注

532
大伴宿奈麻呂宿祢二首

打日指宮尓行兒乎真悲見
留者苦聴去者為便無

うちひさすみやにゆくこをまかなしみ
とむれはくるしやれはすへなし

533
難波方塩干之名凝飽左右二
人之見兒乎吾四乏毛

なにはかたしほひのなこりあくまてに
ひとのみるこをわれしともしも

534
安貴王一首并短歌

安貴王娶因幡八上采女係念極甚愛情尤盛於時勅断不敬之罪退却本郷焉于是王意悼怛聊作此歌也

遠嬬此間不在者玉桙之
道乎多遠見思空安

とほつまのここにあらねはたまほこの
みちをたとほみおもふそらやすからぬ

しこゝろみことハ帰るまゝに
雲の為にかけてあるハ
昭か妹かりゆきそいふ
うちさまよひ哀なる也
と為吾為妹乃訓ハ
切あハれなるへし
いまもみるごとく言氣雲
身ハしこしてゆるかごとく
八上采女に相副まゐらせたまひしと之
ともしなしたまひて
八上采女にめでしく密通故
しかあひたまひけむ肩
題注ニ退却本郷といへるは因幡
そかへしのまゝに凡采女ハ
諸國乃郡司のむすめ乃形容端正なるものをたてまつる從丁從女ならの
ゆゑしおほやけにつかへまつる一百戸を采女一人乃粮に宛とぞ　日本紀職員令

莫國　嘆　虚　不安　物乎
なくにかけくうつやすからぬものを
水空　往　雲介毛　欲成　高飛
みそらゆくくもにもかなとたかとぶ
鳥介毛　欲成イかなん　明日去而　於妹言問
とりにもがもなあすゆきていもにことゝひ
為吾　妹毛　事無　為妹
わがためにいもゝことなくいもがため
吾毛　事無久　今裳見　如
われもことなくいまもみるごと
副而毛　欲成イ
たぐひてもがも

反歌

敷細乃　手枕　不纒　間置而
しきたへのたまくらまかずへだておきて
年曽経来　不相イあはぬ念者
としぞへにけるあはなくおもへば

ホ系かくてこゝに任へしさく六年ばかり傍る拙し陪膳御湯殿乃役を仕るもの之
然るに八上采女安貴王に密通せしかハ敬乃罪あるゆへに因幡本郷に送られそ
かへし給ひけるとぞ
部内　領部の内の采女之
何かのかみの許にはかりて
オ一オ二句ハ序詞にて
乃海ハ出雲にありこゝを
いふといふ人ハもあるへし
我おもふ人の歌ハ
もさこゝのかたを思ひしのハ
己に従ひてゆかれハ
君ハ我ならねハ我のこ
とひやゆかんとおもふを
のかたをとほくおもひ
まかんやの心あるへし
ことよくいとこも

門部王戀歌一首

門部王任出雲守時娶部内娘子也未有幾時既絶往来累月之後更起愛心仍作此歌贈致娘子

飫宇能海之　鹽干乃　潟之　片念尓
おうのうみのしほひのかたのかたもひに
思哉　将去　道之永手呼
おもひやゆかんみちのながてを

贈今城王歌六首　高田女王

事清　甚毛　莫言　一日太尓
ことぎよくいともなのりそひとひだに
君伊尓之　哭者　痛寸　取物
きみいしなくはいたきゝずかも

君とかくしける於の多ふ
やらく君あくらしを
ひきらんとそひまう
さのとる事深くゆーり
一日も君あくハ我か形
ことといし八例の御言也
人ことをしげみこちたみ
こちたみハ事の甚痛き
や事と志き也さうあき
人こと繁(シゲ)くことはき
故え逢さりをいはし
心あるしこひこそあ也
わがせこしとげんと
せこしのしハ助字也
今職王未遂ありんなさ
まろせこふみそありと

人ことをしげみこちたみあはざりき
他辞乎繁言痛不相有寸

こころあるごとなおもひわがせこ
心在如莫思吾背子

わがせこしとげんといはゞ人ことは
吾背子師遂常云者人事者

しげくありともいでてあはましを
繁有登毛出而相麻志呼

まろせこにまたはあはじかとおもへばか
吾背子尓復者不相香常思墓

けさのわかれのすべなかりける
今朝別之為便無有都流

この世には人ことしげしこんよにも
現世尓波人事繁来生尓毛

あはんわがせこいまならずとも
将相吾背子今不有十方

とこしへにかよひし君がつかひこず
常不止通之君我使不来

いまはあはじとたゆたひぬらし
今者不相跡絶多比奴良思

けさ別くなきや今様まふみハえあはしやと
この世まハ人ことしげし 現世まハ人事さりかて自由
とこしえふかゝひし君か 仙日とこしとかふハ常あとくし
事也 ものふ隠武物ふわかさ頭ふくさてよろし
とゆふふ心何るやしん帝りかよひし君か使乃ふさるもまかなるに

神亀元年甲子冬

續日本紀九元正天皇神亀元年十月辛卯天皇幸紀伊國壬寅詔曰登山望海此間最好不勞遠行足以遊覽故改弱濱為明光浦宜置守戸勿令荒穢春秋二時差遣官人奠祭玉津嶋之神明光浦之靈 中畧

神龜元年甲子冬十月幸紀伊國之時為贈從駕人娘子所誂作歌一首并短謌 笠朝臣金村

すめろきのみゆきのまにまもののふの
天皇之行幸乃随意物部乃

やそとものをといでゆきし うるはしづまは
八十伴雄與出去之愛夫者

あまとぶや かるのみちより たまだすき
天翔哉軽路従玉田次

うねびをみつゝ あさもよし きぢにいりたち
畝火乎見管麻裳吉木道

やすとものおと行幸
供奉乃諸臣として出ゆ
きしわか恋ハゆえいと
あまさかるひなにしあれは天と
かやハかゝる枕詞大
和乃りるく紀列の名を
むつかしきわれをいひて
いつかのうへきを縄を
さりて此度の様行を
係豆にて我を置ゆく
なきとゆハされたを
けうふハ仙日いうく
けふくと云詞人の猶
ふよさらけんと云也
和語の事乃き目を
ハうれハ上を略する

尓入 立 真土山 越良武公者
りいりたちまつち山こゆらんきみハ
黄 葉乃 散飛 見乍 親
もみちはのちりとふみつゝむつましく
吾者 不思 草枕 客乎
きわれをハおもハしくさまくらたひを
便宜 常 思 作 公者 将有跡
よろしとおもひつゝきみハあらんと
安蕪蕪ニハイ 且者 雖知 之如 須我仁
けうふハかつハしれともしかすかに
黙然イて 得 不在者 吾 背子之 往乃萬萬
もたえあらねハわかせこかゆきのまにまに
将追 跡者 千遍 雖 念 手 嫋 女
をはんとハちたひおもへとたをやめ
吾身之 有者 道 守之 将問
わか身にしあれハみちもりのとはん
呑乎 言 将遣 為便乎 不知 跡
こたへをいひやらんすへをしらすと
立 而 爪 衝
たちてつまつく

きゝくとさゝくさかくとけさるくとけさるさまの哉
をさしおもねハさらしてもえけれはかしこまりて
ゆきわかれたく ゆきし路よりしゆきしりかへりぬとするなり
ゆきのわの不安云名をとむる人ハ関也 東女の身ちかく他所へとひゆかん
なをする関もわきのとかめんまいかふに差つんとてまかせやれとこいへ
そて立てつきつくと云也
をくれゆく恋つゝおもすハ
とられゆく恋ゆかるハ
まけれすハとこにおくハ
紀の国ハなくいもせ山
らんといもそのひ
乃ハもせ山とよめり
わかせこか行とふみ求め
いもせんの伊ハ助字也
おの哥ハわかせこかゆきの
まにまにくをとりんといへと云也

反歌
後居而 戀作 不有者 木國乃
をくれゐてこひつゝあらすハきのくにの
妹背乃山尓 有益物乎
いもせの山にあらましものを
吾背子之 跡履 求 追 去者
わかせこかあとふみもとめをひゆかは
木乃 関守 伊将留 鴨
きのせきもりいとゝめてんかも

二年乙丑春三月幸三香原離宮
之時得娘子作歌一首并短歌

546 547 548 549 550

せき関紀伊のくにゝ至
みかのはらたびのやどり
山城乃瓱原の離宮(みか
幸せ供奉の時見れし
女のまぎれあひに 彼娘
子をかなしめるあはむ逢
あま雲のよそに ゆきま
君にはよそに見ん 枕絶
あめつちの神もよばせて
天神地祇にことよせぬ
ひとくこよひ ま婚の
わすれいさけしとの心
あはんて 袖をかへさ
百夜のなかきをしえも
我妻ともとめる二人
あれは秋の百夜のなき

笠朝臣金村

三香之原 客之屋取尒 珠鉾乃
みかのはらたびのやどりにたまほこの
道能去相尒 天雲之 外耳
みちのゆきあひにあまくものよそにのみ
見管 言将問 縁乃無者 情
見つゝこととはんよしのなけれはこゝろ
耳 咽乍有尒 天地 神祇
のみむせつゝあるにあめつちのかみ
辞因而 敷細乃 衣手易而
ことよせてしきたへの衣手かへて
自妻跡 憑有 今夜 秋夜之
おのつまとたのめるこよひ秋のよの
百夜乃長 有与宿鴨
もゝよのなかくありこせぬかも

反歌

天雲之 外従見 吾妹兒尒
あまくものよそに見しよりわきもこに

もゝ夜のいねかもし
くるしと 他日よいとは
思ふくいそぬるときこと
あかつきのよるふかし
おのしりしさ見行之
この夜のはやく明れをも
心は咽いせわくのみ秋の
よれしまとにうとある
とある 家れ奉るにや
あめつちの神も助よ
ゆくへの三首とし足人
知らぬの妻をのむかや
さ木下葛をて家
地祇に祈る心深切
おほふねのたのむ心
大船のは頼もしき物の

心毛 身副 縁西 思尾
こゝろもみさへよりにしものを
今夜之早 開者 為便 乎無三
こよひのはやくあけなはすへをなみ
秋 百夜 乎 願 鶴鴨
秋のもゝよをねかひつるかも

五年戊辰太宰少貳石川足人朝臣遷任餞于筑前國蘆城驛家歌三首

作者未詳

天地之 神毛 助与 草枕
あめつちの神もたすけよくさまくら
羈行 君之 至家 左右
たひゆくきみがいへにいたるまで
大船之 念憑 師 君之去者
おほふねのおもひたのみし君かいなは
吾者 将恋 名 直相 左右二
われはこひんなたゞにあふまでに

554 553 552 551

故さひめらしの趣旨と
こひんなのなハ助字之
やまとぢのしまのうら
序多し浪ハあひだもなく
よするからいひかけ恋ま
くハとハ恋るへとこそま
くハる也八雲抄ニハ嶋の
うら筑前となし但大和路
の嶋とハ京の路ハ都
く大和国ニ至され紀
〈上り下ル〉を山跡路と
いひて筑紫ちち上る
君をともいて奈和
路の浦の浦とぞよめ
わかきミハわけをハ
しね袖中抄ニ見安案ニ

山跡路之島之浦廻尓縁浪 間無牟吾戀巻者

やまとぢのしまのうらみによするなみ
あひだもなけむわがこひまくハ

一首 大伴宿祢三依

吾君者和氣乎波死常念可毛 相夜不相夜二走良武

わがきミハわけをハしねとおもへかも
あふよあハぬよふたゆくらん

贈太宰帥大伴卿歌二首 丹生女王

天雲乃遠隔乃極遠鶏跡裳 情志行者戀流物可聞

あまくものそきへのきハめとほけれとも
こころしゆけハこふるものかも

古人乃令食有吉備能酒 病者為便無貫簀賜牟

いにしへの人のめさせるきびのさけ
やまハすへなしぬきすたまはん

我さしよ世ハ我をわ
えね夜のさしる宮わり
冬ね夜の路ニ此你
切ある心をよめり但仙抄ニハわけハ男也落句二走良武ツかてゆく
あんとよみて二ゆしと云ハ一節めくす二ゐあるを云とミことふ〔如古点〕
こゆまよのへそのきハめ遠けれともへをそれとも宰府ハ遠けれとも
心ハゆくらんハ恋しとそ仙抄ハ国ハ遠くとハこころハ恋ふるとそ
いにしへの人のめせる袖中抄ニ云昔ハ此ゆの名をハ備前備中備後を
吉備三ヶ国と云ふ我をめくみ吉備中備の国ニ禰宜ハ此る万葉集
抄ニ云ふ酒を飲みて酔て病をひ貫簀
簀のかりて及吐汚らんと云貫簀ハ簀子也上一袖中抄 但国まひ
乃酒ハ黍にて作る酒也貫簀ハ竹みくみすのやうニあみてうね
の上ニしきてまくらの乃さばしりの乃流るらさんさめしミこ
玉来やとりくとハ酒
やまひありて身ある
とりて

贈大貳丹比縣守卿遷任民部卿歌一首

大宰帥大伴卿

きみかためかミしまち酒
仙曰かミハ酒を作る
を云やすの野ハ筑前
に野聚(ヤス)郡の彼野
を詠る也私云筑紫
にハ待人のさけに作る
酒とまち酒と云仙覚抄
玉東醸てまつハくし
するとも云いかりしも
喜遍此ハ帥卿任ニ
民部卿ニ太宰府をのぼらるゝときひとくよめり日本紀ニモ醸ハ醞酒(カミヤホリサケ)とあり
作てかねまちもこされハ何りめハ兼てもうくるとよめり
そもよめり何つるきみハ心何くきき人ふやあゝめる神すの
こゝひあるも筑紫へ遠ふあれハまづこぬといえん槻筑紫舟と云也
ふこぬる兼てよみ
を納やうまぬもとる

555 為君 醸 待 酒 安 野尓
独 哉 将飲 友 無二 思手
きみかためかミしまちさけやすのゝによ
ひとりやのまんともなしにして

贈大伴宿祢三依歌一首
賀茂女王

556 筑紫船 未毛 不来 者 豫
荒振 公乎 見之 悲左
つくしふねまたもこされハかねてより
あらふる君を見るかかなしさ

従筑紫上京海路作歌二首

とある也
おほふねをこぎのすゝみに
こぎのすゝみハこぎすゝむ
時にと也磐に觸れハ危三
也ふ何るとも危き事と云
母と何ゆゑと云て妹ゆゑに
とおもひてハよしとぞ
ちはやふる神の社よ
幣をかけし妹にあハ
ねハ不叶乃しるしなし其
ぬさをかへさんとふや
ことゝもなくいきこし
をるみハ老乃身之若
き様にするゝの義
さよはかうきさ恋するとぞ
こひしなんのちハなにせん

土師宿祢水通(ハジノスクネミミチ)

557 大船乎 榜乃進尓 磐尓 觸
覆者覆 妹尓因而者
おほふねをこぎのすゝみにいはにふれ
かへらはかへれいもによりては

558 千磐破 神之 社尓 我掛師
幣者 将賜 妹尓 不相國
ちはやふる神のやしろにわかかけし
ぬさはたばらん妹にあはなくに

戀歌四首 太宰大監大伴宿祢百代

559 事毛 無 生 来之物乎 老奈美尓
如是 戀 于毛 吾 者 遇流香聞
ことゝもなくいきこしものを老なみに
かゝるこひにもわれはあへるかも

560 孤悲死 矣 後者何 為牟 生 日之
為社 妹乎 欲見 為礼
こひしなんのちハなにせんいけるひの
ためこそいもを見まくほりすれ

拾遺集六にも見え
しめらう人ハ歌くれ
それを類聚同案
風俗りすへしミ心明之
おもはぬをおもふといふ
仙覚大野なる三笠森ハ
統おもし万葉日本紀九ニ神功
皇后の御笠飄風ニ吹落
亦と御笠とりミニ祇曰我
偽あはきゝ心を遊加えんと
いとまなき人の眉根
偕あつき人とうんぞ
八眉根とかくとミ万葉眭[ヨコメカニ]
日眼[ミル]皮瞤今朝良人見遊仙[ヨキヒトヲ]嶌
かゝるこひにはいまだあはなくに
至耆 おいるまで おひされと 類聚 仙点

不念常思者大野有
おもはぬをおもふといはゞおほ野なる
三笠杜之神思知三
みかさのもりの神ししるらむ
無暇人之眉根乎徒
いとまなき人のまゆねをいたづらに
令掻乍不相妹可聞
かゝしめつゝもあはぬいもかも

二首　大伴坂上郎女

黒髪二白髪交至耆 おいれと イ
くろかみにしろかみまじりおゆるまで
如是有恋庭未相 イいまだあはなくに
かゝるこひにはいまだあはなくに
山菅乃実不成事乎吾尓所依
やますげのみならぬことをわれによりて
言礼師君者与孰可宿良牟
いはれし君はたれとかぬらん

一首　賀茂女王

大伴乃見津跡者不言赤根指
おほとものみつとはいはじあかねさし
照有月夜尓直相在登聞
てれる月夜にたゞにあへりとも

やますげ乃みならぬ
八雲抄云山菅ハ実ならぬ
すけなきの名なてと
云又実なることも有普
通の山すげ実あり万葉和名童蒙抄おもと麦門冬をやますげとよめりあ
るさ実なるゆゑをみなるねとハ実のすとなりいひいれしたる
あまさ名なく称あつてやみしなハ今ハ誰とかぬらんと恨る也
おほとも乃みつとハいはじ
大伴乃みつはみ津にいひかけたるのみにいひとど
かけしい明かゝる月夜にたゞにあへりともいひてことと
いへりなほさしハ只明かゝるをいひしにおほ

以前天平二年庚午夏六月帥大伴卿忽
生[ニ]瘡[ヲ]脚[ニ]疾[アシイタミ]苦[ニ]枕席[クルシム]因[テ]此[ニ]馳驛[シテ]上奏[シテ]
望[ニ]請[ニコヒテ]庶弟稲公姪[ヲイ]胡麻呂[ヲ]欲[ス]語[ニ]遺[ヲ]
言[ヲ]者勅[シテ]右兵庫助大伴宿祢稲公
治部少丞大伴宿祢胡麻呂両人[ニ]

贈[ル]驛使[ハイミツカヒニ]歌二首

以前此歌をさして云也と
帥大伴卿旅人なり
馳驛上奏 馳驛とハ
今世乃はや飛脚乃
ごとく都に急を告る
ゝ大伴氏の家の始也

給驛發遣令看卿病而逕數旬幸得平復于時稲公等以病既癒發府上京於是大監大伴宿祢百代少典山口忌寸若麻呂及卿男家持等相送驛使共到夷守驛家聊飲悲別乃作此歌

太宰大監大伴宿祢百代

草枕羈行君乎愛見副而曽來四鹿乃濵邊乎

くさまくらたひゆく君をうつくしみたくひてそこししかのはまへを

少典山口忌寸若麻呂

周防在磐國山乎将越日者手向好為與荒其道

すはうなるいはくに山をこえん日ハたむけよくせよあらきその道

給驛發遣　つかひ世の竹[?]ゐるをあつけて發足することなり

逕數旬　数十日にわたる也[?]

發府　太宰府を立て[?]出る也

大監　太宰府乃せうげん也[?]

少典　せうさくわん也[?]

夷守驛家　所乃名也

驛使ハ稲公と胡麿也

草まくらたひゆく君をうつくしみハ驛使を大切[?]におもひ[?]ていとをしみ思ひしこと[?]にうつくしハ[?]まかせて[?]也

鹿乃濵邊ハ筑前[?]鹿浦也

すはうなるいはくに山ハ[illegible]

大宰帥大伴卿被任大納言臨入京之時府官人等餞卿筑前國蘆城驛家歌四首

筑前掾門部連石足

三埼廻之荒礒尒縁五百重浪立毛居毛我念流吉美

みさきまのありそによするいほへなみたちてもゐてもわかおもへる君

大典麻田連陽春

辛人之衣染云紫之情尒染而所念鴨

からひとのころもそむといふむらさきのこゝろにしみておもほゆるかも

山跡邊君之立日乃近付者

やまと(へ)に君かたつ日のちかつけは

手向とハ旅の手向にて[?]とる[?]祖神に[?]ぬさをたむけて神の[?]心を[?]なごめ[?]周防の[?]海をこゆる[?]ことを[illegible]ほめて[?]申也[?]

山跡ハやまと也[?]手向[?]ハ道[?]に向ふ[?]也[?]

手向とハ神[?]乃[?]祖神[?]ニ[?]と為[?]共[?]

風俗通云共工氏之子好遠遊故其死後以為祖サへノカミトス

府官人　太宰府乃支人

石足　陽春　四綱[?]也

みさきまのありそによすいほへなみまて[?]ハ

八重がさね乃ふかき[?]をいふ[?]乃筑

いろ[?]乃[?]みさきハ三埼[?]のおこさ[?]

君[?]とハ[?]をいふ[?]

の[?]ゐ[?]上る[?]ハ席[?]をたつ[?]也[?]

りくひとの夜らむとふ
序文之筆乃澤をとく
て別乃宴ふきむすと云
やまとへは君か立ら見
君ハ旅人卿と小野乃
に鹿もとよもの字
動乃字をこめてし
月夜よし河をと清し
雅會嘉客離を懐京
乃宴の人もとまるも
も離情をなさんとの
防人乃〻おニ佑
まそかゝみ見あかぬ君に
去ての後ハ松浦さひてハ
独佗然と立居る〻し
ぬはしらかれかしかしら

野立鹿毛動而曽鳴
野にたつしかもとよみてそなく

防人佑大伴四綱

571
月夜吉河音清之率此間行毛不去毛遊而将帰
月夜よし川をときよしいさこゝに
ゆくもとまるもあそひてゆかん

大宰帥大伴卿上京之後贈之歌二首

沙弥満誓

572
真十鏡見不飽君尓所贈哉且夕尓左備乍将居
まそかゝみ見あかぬきみにおくれてや
あしたゆふへにさひつゝをらん

573
野干玉之黒髪変白髪手裳痛恋庭相時有来
ぬはたまのくろかみかはりしらけても
いたきこひにはあふ時ありけり

いくとなる事れハとき
いき度ても逢事あらと
云ハ我も立つき卿は
争つても逢ぬハあらん
とこのよし
こてふおかてつゝや
湖辺方を立る心之
此旅新古今六ある
川山乃あゆかけしと兵
なきり江乃入江よ
仙草香江摂陣豊前
哥之訴あうらくしも
ことしなかくて
俊成芦之さて立の
寿月ねて相聞哥ふ
入相聞乃心推て知へし

和歌二首　大納言大伴卿

574
此間在而筑紫也何処白雲乃棚引山之方西有良思
こゝにありてつくしやいつこしら雲の
たなひく山のにしにあるらし

575
草香江之入江二求食蘆鶴乃痛多豆多頭思友無二指天
くさかえの入江にあさるあしたつの
あなたつたつし友なしにして

大宰帥大伴卿上京之後筑後守葛井連大成悲嘆作歌一首

576
従今者城山道者不楽牟吾将通常念之物乎
いまよりはきやまのみちはさひしけん
わかかよはんとおもひしものを

贈新袍摂津大夫高安王歌一首

此歌作者大納言と云
上京の時の歌なり
いまわりハきし山の名ハ
城山ハ今の三在大宰府に
ここ大伴卿を宰府より送
いつまでも我のわかれん
とぞして上京しける人
を通りてさひしからんと
わがきぬを人になきせそ
我心さすかなれハ皆
らるゝとぞいふんとぞこ
あみほくすハ網引の
男に雅なる人の手にふれ
の人にハきせまじといふ
のみなれハ難波男に
あめつちとともに

577
大納言大伴卿
吾衣人莫著曽網引為難波壮士乃手尓者雖觸
わがきぬを人になきせそあみひきする
なにはをとこの手にはふるとも

578
悲別歌一首 大伴宿祢三依
天地与共久住波牟等念而有師家之庭羽裳
あめつちとともにひさしくすまはんと
おもひてありし家の庭はも

與大伴宿祢家持歌二首 金明軍

579
奉見而未時太尓不更者如年月所念君
見まつりていまだ時だにかはらねば
としつきのごとおもほゆるきみ

大伴ではいつまでも住なん
とおもひし家庭の事を
おもひいでてなりとぞ
見まつりていまだ時
宰府にて見まつりて今別
てもいまだ時もかはらねハ
宰府にて別しより年月
の心ちにて別しをおもひ
あし川乃山菅乃根
序にて菅の根のねもころ
ころと言けて戀ひるあ
さいしすみ上かれまし
ほまてあれハ見まくも
ほしく此世ならハ見る
事も自由なるハのちにはさらんよ妹にのちまた夢にも見えよと
家持ハいとせまりしてとあるへき事也

580
足引乃山尓生有菅根乃懃見巻欲君可聞
あしひきの山におひたるすがのねの
ねもころ見まくほしき君かも

大伴坂上家之大嬢報贈大伴宿祢家持歌四首

581
生而有者見巻毛不知何如毛将死与妹常夢所見鶴
いきてあらバ見まくもしらずなにしかも
しなむよいもとゆめに見えつる

582
大夫毛如此戀家流乎幼婦之戀情尓比有目八方
ますらをもかくこひけるをたわやめの
こふるこゝろにたぐへらめやも

ナすハおもひかく恋ふるを　もハ家持のえあはぬ故をそハやりしに報贈る
あるよし男より女ハ礼心ありする(さきにまするかふかく恋するを我女として忘ると

おもハれ奴(ヤツコ)(ハナシ)
月草のうつろひやすく
月草ハ露草(ツユクサ)の花
うつろひやすき花にて
忘れもハせするのと我
とかりそめにてあるみやこ
とつけもおもへと

かすかの山あさゐる雲の
居ぬまくとハいはん序
言ひ君我方に居ねば
にして見まくほりすると
いでていなんとおもひハ
妻恋に堪りかねてゆく
といふべく思ふ心なり

月草之徒安久念可毛我念人之事毛告不來
つきくさのうつろひやすくおもへかも
わかおもふ人のこともつけこぬ

春日山朝立雲之不居日無見卷之欲寸君毛有鴨
かすか山あさゐる雲のゐぬ日なく
見まくのほしききみにもあるかも

大伴坂上郎女一首

出而將去時之波將有故妻戀爲作立而可去哉
いでていなん時しハあらんことさらに
つまこひしつゝたちていくへしや

贈田村大孃歌一首　大伴宿祢稻公

あひハさりし心ならましで
いまはもこふらんとあ
恋にまどひゆく(なきよりハ
とうこと又ハ絶とてく
あひ見ずハ恋さらまし
袖中抄二本名ハよしなく
ふ心とえしり万葉乃
哥とも言心に玉葉尺
すハ恋しきとよしなか
く妹を見てかくのみ恋
するハりすへきすると
わかかたみ見つゝしのはせ
我もおもふ年の緒長く
あら人君も我形見を見て
忘れずとおもひ思へとし
しらとりのとば山松の

不相見者不戀有益乎妹乎見而本名如此耳戀者奈何將為
あひ見ずハこひさらましを妹を見て
もとなかくのみこひハいかにせん

贈大伴宿祢家持歌二十二首

笠女郎

吾形見見管之努波世荒珠年之緒長吾毛將思
わかかたみ見つゝしのはせあらたまの
としのをなかくわれもおもはん

白鳥能飛羽山松之待乍曾吾戀度此月比乎
しらとりのとは山松のまちつゝそ
わかこひわたるこの月ころを

衣手乎打廻乃里尓有吾乎不知曾人者待跡不來家留
ころもてをうちわの里にあるわれを
しらすそ人ハまてとこすける

白多へハ多和乃枕詞也山志
ろ之第一第二句ハ序なり
こゝもてきうちよの里
八雲おうちよの里大和に
衣をうつところて之趣
を搗女の衣打する文選に
小女こすゝ乃ハきこゝろ
さりけるしぶ及川讀
行しるれにこの人
婦めかくし思ふ中と註
かまこ八君ゆゑよ乃よりきこそをしゆるへりれハ我中しまへゆけハ今ゆ
とゝゆみく我名を人ゝ告るまうもおんゆめくよ告るまうと
すすまし今告そハ乃し八助字之ゆめよハゆめくうちいさむる詞之
わか君のいさ人ゝ告てまや玉匣を開きゆくるとあるハ我世いと
君か人ゝかひ告てするみやこと第ニと明るハ胸中を孤きと如く見れそあり
しきすたにあくある　夜鶴乃闇ニあるくねハようにちえても形ハえてしぬ

590 荒玉年之経去者今師波登　勤与吾背子吾名告為莫
あらたまのとしのへゆけハ今しはと　ゆめよわかせこわかなのらすな

591 吾念乎人尓令知哉玉匣　開阿氣津跡夢西所見
わかおもひを人にしらすや玉くしけ　ひらきあけつとゆめにし見ゆる

592 闇夜尓鳴奈流鶴之外耳　聞作可将有相跡羽奈之尓
やミのよになくなるたつのよそにのミ　きゝつゝかあらんあふとはなしに

とおもふ人えて行ハちかくてようこひにめとまりて行んりと云の義也
いともハ心なし意を云
作てせんかたなきなり
奈良山松のもとに歌さ
てわかるゝと之
わかやとの夕かけ草
詞林采葉云夕陰草ハ夕
かけの草とみえたり
然るに此集に夕かけ草
のまきる葛乃夕かけ
にあく蓬きけとあ
りぬかもしけ此歌ハ夕陰草をしるしてよめり家に夜一夜草と
此歌を此哥ハ夕かけに死にも夜あまれハ草ふむ如くし夕かけ草と
(きこ)中略 玉葉夜一夜草乃説何とある(乃れと古人ハ只夕かけの草と
見ゆるを今案乃説甲ひしきにや此歌上句ハ序にしけぬりかにとなむ

593 君尓恋痛毛為便無見楢山之　小松下尓立嘆鴨（或作鶴　たちなけきつる）
きみにこひいともすへなみならやまの　こまつかしたにたちなけくかも

594 吾屋戸之暮陰草乃白露之　消蟹本名所念鴨
わかやとのゆふかけ草のしらつゆの　けぬかにもとなおもほゆるかも

595 吾命之将全幸限　忘目八　弥日異者念益十方
わかいのちのまたからんかきりわすれめや　いやひにけにハおもひますとも

わかるゝはきゆるかきしさるれやさよふけゆくにはよるやとこにつまこふる人を念ふ
かけてくやりをとはまくくるしきけれはといさゝかなれは
わかゆめちにさけんかきりなし安雲寺のくたりしをいやはるかに口にとゝ
ふとしも念しお注西東寄乃心ハ吾令れ合ひんことハ何日ことにおもひまする
わすれもしとよや

596
やをかゆくハ数百日ゆく浜の意ゆく
やをかゆく濱のまさこも
まゆく意なりの意ハ浜の真砂ハ数え
浜の真砂かれハ何數
也拾遺集にハ浜のまさ
こと我戀とそまさ
れりとする心ハ同

八百日往　濱之沙毛　吾戀二
やほかゆくはまのまさこもわかこひに
豈不益歟　奥島守
あにまさらめやおきつしまもり

597
うつせみ乃人めをしけみいしはしの
奥儀於云はゞのあけ
て切るを垂て言挿し
人も知りなれハちかきこと思ひてへんそうつせみと云

宇都蟬之　人目乎繁見　石走
うつせみの人めをしけみいしはしの
間近　君尓　戀度可聞
まちかききみにこひわたるかも

598
戀尓毛曽　人者死為　水瀬河
こひにもそ人はしにするみなせかは
下従吾痩　月日異
したゆわれやす月日にけに

まちかく念わたるといへん別ほし心ハ人めおほきに多くてかくさ
中もこひわたる也
こひにもそ人ハしにする　水無瀬川ハ古今集にも見ゆ
川下にすくひとよめりけるも下に痩やすといへん枕詞也月日にけ
てもなきも下に痩すれハこひにも人ハ死ぬへきとなり

599
あさきりのおほに
朝霧之　欝相見之　人故尓
あさきりのおほにあひみしひとゆゑに
命可死　戀渡鴨
いのちしぬへくこひわたるかも

朝霧ハおほのまくらこと
枕詞也まさへ抱きあ
ひにのれた

600
伊勢海之　礒毛動尓　因流浪
いせの海のいそもとゞろによするなみ
恐人尓　戀渡鴨
かしこきひとにこひわたるかも

いせの海の磯もとゞろに
序なし恨事かこき
いはるも我か上の

601
心従　情毛　吾者不念寸　山河毛
こゝろゆもわはおもはすき山川も
隔莫國　如是戀常羽
へたゝらなくにかくこひんとは

人と意る心なそこゝろ
こゝろも我ハとはそ

602
暮去者　物念益　見之人乃
ゆふされはものもひまさるみしひとの

山深ちこそあれ
夜ゆふハあやめ隔

よくねよかくゐんとハ
我家も出すとし
ゆふされハ物おもひまさる
久ふまし付立こゝろ
おもひめしきさまにもなる物
類聚万葉二六千遍曽之
みそと和スハちつハ少月
拾遺集二六ぬ和す
るふとまそちつなり
とる悩る人丸とこ
はるきこゝちなり
上るかる自問自答乃
哥也さとしハりのくちさるを下はれしと也る也抑見お表を見し此哥を
いのちさへしぬやと問て君ふあらんさめあらん為ふ死ぬる也とこれを
ためつちの神と 天神地祇為理(コトワリ)なく八我(ワガ)ぬる(コフルキミニアハズシテ)
との心也日本紀廿三ふ山背(ヤマシロ)ノ大兄(オホエノ)王(ミコ)曰天(アマツ)神地祇共証之とこゝ此証ふ仰より

言問為形 面景為而
ことゝひしすかたおもかけにして

603
念西 死為物尓 有麻世波
おもひにししにするものにあらませハ
千遍曽吾者 死變益
ちたひそわれはしにかへらまし

604
剣大刀 身尓取副常 夢見津
つるきたち身にとりそふとゆめにみつ
何如之怪曽毛 君尓相為
なにのさとしそも君にあはんため

605
天地之神理 無者社
あめつちの神もことはりなくはこそ
吾念君尓 不相死為目
わかおもふきみにあはすしにせめ

わかもおもふ人もこゝろよせおほなわに
八雲抄おほなわおほ海とあり
とりいふ也こゝに重集渡海
八大わたつみもやむときなかれを
やむすつれもいはん
渢也止時なく思ふと也
子なんをねよとの鐘は
皆ねよとの也初夜
乃鐘也宋集下る君と
こゝにいねかてきかもと也
あひおもはぬ人を古来用捨云是の趣のたとへと也又餓鬼ともいはれて言を
童蒙抄云むかし八寺ふ餓鬼とたとへりすこしかりそれをたとへて
ある人ハ佛とおもひてぬかをたきよかりされハおもはぬ人をおもふ
なんかいふ也仙覚抄云此餓鬼八雲抄云是ハあひおもはぬ人をおもふん
せんなき事也大寺のかくハ佛なりこそぬかつきもせくへきにかきのしりへにぬかつかんハ
せんなきのかきよせり万葉ぬかつくハ額をつけてぬかつく礼拝する也

606
吾毛念 人毛莫忘 多奈和尓
わかもおもふ人もわするなおほなわに
浦吹風之 止時無有
うらふくかせのやむときなかれ

607
皆人乎 宿与殿金者 打礼杼
みな人をねよとのかねはうつなれと
君乎之念者 寐不勝鴨
きみをしおもへはいねかてにかも

608
不相思 人乎思者 大寺之
あひおもはぬ人をおもふはおほてらの
餓鬼之後尓 額衝如
かきのしりへにぬかつくかこと

609 こころにもわれはおもはず
旅日立わかれつる上で
また我ふるさとへかへらんとは心にも
おもはずと家持を笠郎
女恨てよめる也恋慕甚
とは家持のことを云也
嬢の我住し里見れば也

610 ちかくあれば見ねども
君がいまさば君がと
をくおはしなばおかて
もたへしかるまじと云

611 しき堪忍せじと也
いまさらに妹にあはめやと
と思ふ妹にあらしと云故
うつうつとふさがりてなげかん

612 されば又逢ことを

613 なかなかにもだもあらましを
黙止てあらんにはなにせかは
うき恋を得ふ又逢初
めん後は果さへ人
心ことさへ別れを
うらむ心なるべし

614 物思ふと人に見えじと
日比は物思ふ気色を見せぬ人
なれどもみえしとおもひしが常に
なきくらしたるこそ堪ては
たえかぬる恋をもの心也

615 わがせこはあひおもひねん人をや
ことよしあるべし袖
ひつるはひるなくまなの

616 としは時也
わがせこはあひおもはずとも

相別後更來贈歌二首　笠女郎

従情毛我者不念又更吾故郷尓将還來者

こころゆも わはおもはずき またさらに わがふるさとに かへりこむとは

近有者雖不見在乎弥遠君之伊座者有不勝自

ちかくあれば みねどもあるを いやとほく きみがいまさば ありかつましじ

和歌二首　大伴宿祢家持

今更妹尓将相八跡念可聞幾許吾胸欝悒将有

いまさらに いもにあはめやと おもへかも ここだあがむね いぶせくあるらむ

中中黙毛有益乎何為跡香相見始兼不遂尓

なかなかに もだもあらましを なにすとか あひみそめけむ とげざらまくに

贈大伴宿祢家持歌五首　山口女王

物念跡人尓不見常奈麻強常念弊利在曽金津流

ものおもふと ひとにみえじと なまじひに つねにおもへり ありぞかねつる

不相念人乎也本名白細之袖漬左右二哭耳四泣裳

あひおもはぬ ひとをやもとな しろたへの そでひつまでに ねのみしなかも

吾背子者不相念跡裳敷細乃君之枕者夢尓見乞

わがせこは あひおもはずとも しきたへの きみがまくらは いめにみえこそ

劔大刀名惜雲吾者無

つるぎたち なのをしけくも われはなし

君かもせこと云んてこ
そ見えこそとりて君ハ
れさりきとも松ハ多
まちてうるさ
行きてうらみのわり
大刀ハ孫かれハ名をいふ
枕詞なり云手寸ある
みかりみつくとつけ須ハ
てふれハ雛鳥との思
あへみちくる潮の
上六句ましふといへん諷
過し君か忘れかねつると
いふ君かわすれかね給ふと思
けふおもふらもよふ
るれハよしなやと云也

作者大神（ヲワ 或ハヲホウワ 又ハヲホカ）

おしてるや なにはの菅乃
押照ハ難波の枕詞なり
菅ハ根をとてもせ
ハ根とつひけむ枕
詞ゝ次の詞に係く也
くとも孫深なるも
心ハ報りを過に君か
ゆうし也と深く経
てもく孫をいふとき
ますみ鏡とゆうし心をとぎ
人乃心ハ鏡にとふ磨
心といふ枕詞也 懇
を猫に恵りとつしを
まる心なしせさやかに
つ下みちし心を君に
ゆるして毛日月ね極めて

君尓不相 両年之經去礼者
きみにあはずて としのへぬれば

従蘆邊 満来塩乃 弥益荷
念歟君之 忘金鶴
あしべより みちくるしほの いやましに
おもへかきみが わすれかねつる

贈大伴宿祢家持歌一首
大神女郎

狭夜中尓 友喚千鳥 物念跡
和備居時二 鳴乍本名
さよなかに ともよぶちどり ものおもふと
わびをるときに なきつゝもとな

あまのちの思ひ保々かみにハ君かりかくことゝを
なよふちとり乃物思ひきこゆるに一人物思の侘さ

怨恨歌一首并短歌
大伴坂上郎女

押照 難波乃菅之 根毛許呂尓
君之聞四乎 年深 長四云者
真十鏡 磨師情乎 縦手師
其日之極 浪之共 靡珠藻乃
云云 意者不持 大船乃
憑有時丹 千磐破 神哉将離
空蝉乃 人歟禁良武 通為之
君毛不来座 玉梓之 使母不所見
成奴礼婆 痛毛為便無三 夜干玉乃

おしてるや なにはのすげの ねもころに
きみがきこしを としふかく ながくしいへば
まそかゞみ とぎしこゝろを ゆるしてし
そのひのきはみ なみのむた なびくたまもの
かにかくに こゝろはもたず おほぶねの
たのめるときに ちはやぶる かみやさけゝん
うつせみの 人かさふらん かよはせし
きみもきまさず たまづさの つかひもみえず
なりぬれば いともすべなみ ぬばたまの

夜者須我良尓赤羅引日母至闇
よるはすがらにあからひく日もくるゝまで
雖嘆知師乎無三雖念
なげけども しるしをなみ おもへども
田付乎白二幼婦常言雲
たづきをしらに たわやめと いふもしるく
知久手小童之哭耳泣管俳
たわらはの ねのみなきつゝ たもとほり
徊爾君之使乎待八兼手六
君が使を まちやかねてん

なひきのつせてと
ゆめにとこめて念は
ゆゝす一向に見えと
説ことゝ言見のきは
千とハ言見と限わか
ヒいつくと哭る也
彼の甘さハ彼ヒてまて
藤のなひくことく
て我なひきつゝとる也
ちゑやかる神やかれらん 神乃尾雅をされらん人乃是非かやうんさ
あらくひく 赤く引細之あら小舟と云説也 月もとりらんまで
詞は心は雖夜雖日歌く去る事もなし とわりと知らとし
こをやめといふも去ることハ こをやめらくしよるき指すいかにも去るく
ねのみなき立るともとかりて君が玉章の使やまつと待兼んとを
これハ こハ御字也
ねのと鳴程詞也

反歌

従元長謂管不念恃者
もとよりもながくいひつゝたのめずは
如是念二相益物欲
かゝるおもひにあはましものか

そもわりちくいひて
ちくいひてこれは逢て
詞なくいひ契かなり
ら束そけね情なき
此方にまみりもちく
しへハとまて心なり
ひまもなく乏るなる
よるひるの心のひまも
なく君をこふる故か
らん夢に見てたまと
なり我帰るを待る
よわ君もまくさと云
やり也
くさまくらといふに久
西海道の節度使にて
旅に久しきゆゑなれハ

贈夫君歌一首

西海道節度使判官佐伯宿祢東人妻

無間恋尓可有牟草枕
まなくこふるにかあらん草枕
客有公之夢尓之所見
たびなるきみのゆめにしみゆる

佐伯宿祢東人和歌一首

草枕客尓久成宿者
くさまくらたびにひさしくなりぬれば
汝乎社念莫恋吾妹
なれをこそおもへなこひそわぎも

我にこまつをかへさむと
こゝに云ふつき之節度
使ハ賊（ソク）なとおこる時都
より追討のためつかはさるし
をうけてゆく使也按度
次官判官主典の四等あり
松乃葉ニ月ハうつりぬ
仙点ゆつりぬ仙覚ゆつり
ぬとハ月のうつりぬと云
也主意ハ雲移云云ハ
人ニ逢ハぬ夜おほく
きぬといふとそ松
乃葉にまつうつりぬといひく紅葉のとハよめる也又すゑの葉ちり
て過（スキ）ぬるをいへるを花葉頭とかけり又童蒙抄ニハさとよ
紅葉はうつりかはる有をちりて松はうつらさる也と云説也
道にあひてえみせし　道にあひくわらひしからにえくしもに情ある所を

623

宴誦（スル）歌一首　池邊（ノ）王

松之葉尓月者由移去黄葉乃過哉君之不相夜多焉

松乃葉ニ月ハうつりぬもみちはの
すきしや君かあはぬ夜おほく

624

天皇思（フ）酒人（サカヒトノ）女王（ヲ）御製（ツクリ）一首　女王者穂積皇子之孫女也

道相而咲（イ）之柄尓零雪乃消者消香式戀云吾妹

みちにあひてゑみせしからにふる雪の
けなはけぬかにこふてふわきも

なかみの心
おきへゆきへにゆきとや
いまや乃やハ助字とし
童蒙抄ニ日へふゆきとく
ふしつかへ乃と云さ藻（モ）
臥束（ブシツカ）鮒とハ藻にふし
たる一にきりのふな
と也
きみによりこの事きき
君によりてさわさ無
乃人言しけき故に
るまきよめなすらは
ふりなの流綴なると
也一云ハ中の本なる
より出たり心ハ同じ
おなしかるし

625

褁鮒（ツヽミテフナヲ）贈（オクル）娘子（ヲトメニ）歌一首　高安王

奥弊往邊去伊麻夜為妹吾漁有藻臥束鮒

おきへゆきへにゆきいまやいものため
わかすなとれるもふしつかふな

626

獻（タテマツル）天皇（ニ）歌一首　八代女王

君尓因言之繁乎古郷之明日香乃河尓潔身為尓去

きみによりことのしけきをふるさとの
あすかのかはにみそきしにゆく

一云龍田越三津之濱邊尓潔身四二由久

一云たつたこえみつのはまへに
みそきしにゆく